

# 多形的な「私」の承認をめぐる—Xジェンダーの語りから—

04-154329 武内今日子

## 目次

序章	第3章 「Xジェンダー」になること
1 用語説明	1 自分の性別への違和感
2 問題関心	2 「Xジェンダー」を自認することの機能
3 本研究の構成	3 カテゴリーとの距離感
第1章 先行研究の整理	第4章 「性的マジョリティ」へのカミングアウト
1 「Xジェンダー」の成立背景	1 カミングアウトの選択
2 「Xジェンダー」に関する社会学・心理学的研究	2 周囲の情報と繰り返しによる承認
3 カミングアウトについての先行研究	3 カミングアウトの「失敗」(1) —— 予期していないことへの対応
第2章 インタビュー調査の概要と分析方法	4 カミングアウトの「失敗」(2) —— 親密な関係性における葛藤
1 インタビュー調査の概要	終章
2 調査倫理の説明	1 本研究のまとめ
3 インフォーマントを選んだ基準と偏り	2 「Xジェンダー」というカテゴリーの役割
4 分析方法と分析の視点	3 異質な他者との共存のために
5 限界と意義	

総ページ数 (78 枚)  
総文字数 (99027 字)

## 要約

「Xジェンダー」とは、「男」、「女」、「トランスジェンダー」などの既存のカテゴリーには当てはまらないうと、何らかの意味において感じている人たちを表す、性的マイノリティのカテゴリーである。本研究では、Xジェンダー当事者がXジェンダーというカテゴリーを得る過程と、それを得てからの他者との相互行為に着目してインタビュー調査を行ない、その語りを分析した。本研究の問いは、Xジェンダーというカテゴリーが当事者にとってどのような意味をもち、それが他者との関わりにどのように影響するかということである。そこから、逸脱した個人がどのように生きていくか、異質な他者との共存はどのように可能なのか、という関心に迫ろうとした。そのとき、自己やアイデンティティといった本質的で一貫しているべきという意味合いの強いものよりは、多形的なあり方をするXジェンダー当事者のその場、その時に現れる「私」が、どのように承認をめぐる行為するのかという点に着目した。

第1章では、先行研究を整理した。Xジェンダーに関する既存の研究では、探索的な調査や、アイデンティティの安定性や当事者の困難に着目したものが多く、カテゴリーの作用自体に目を向けるものはほとんどないことを指摘した。さらに、カミングアウト論の整

理から、関係性によって異なる規範のあり方や、カミングアウトというコミュニケーションの形態自体がもつ特質は十分に検討されていないことを指摘した。第2章では、インタビュー調査の概要を述べた。インフォーマントの5人は、同じ当事者団体に所属していることを確認し、筆者もその当事者団体にいるために、共感が生じやすい一方、早とちりのリスクもあることを述べた。当事者性の影響について考慮している点に本研究の特色がある。分析の視点は、ライフヒストリー的なものであり、特にカテゴリーの働きに注目した。

第3章からが本研究の経験的な分析の結果である。第3章では、Xジェンダーになっていく過程に着目し、カテゴリーの機能と限界を論じた。「男らしさ」「女らしさ」という規範に反発し、それをもたらす「男」「女」というカテゴリーに当てはまらないと感ずることが、性別違和の契機となる。そして、当事者がXジェンダーというカテゴリーを得ることで、規範から距離をとって自己肯定感を得ること、集団の場をもつことが可能になっていた。それらの機能は、多形的なあり方に一つのかたちを与えること、自己執行カテゴリーであることというXジェンダーの性質によるものであった。他方、Xジェンダー当事者は、トランスジェンダーなど他のカテゴリーに対してステレオタイプの見方をするこゝもあつた。また、他の当事者との関わりの中、Xジェンダーはこうあるべきという固定的な意味が付与されることがあり、そこから逃れようとする当事者もいることを述べた。

第4章では、性的マジョリティとの関わりに焦点を当てた。まず、カミングアウトの選択がどのようになされるのかを論じ、伝えることが必要な事情がない場合や性自認が曖昧な場合は、当事者は必ずしも人に伝えようとは思わないことを明らかにした。また、周囲の情報や繰り返しが、カミングアウトの受け入れにつながっていたが、それは、あるカテゴリーに含まれるものとしての承認であり、具体的な「私」の感覚は重視されなかつた。特に親密でない相手へのカミングアウトは、無関心やからかいなどのコミュニケーションの困難によってうまくいなくなることを論じた。当事者にとってより重要な意味をもつ、親やパートナーへのカミングアウトがもたらす葛藤にも焦点を当て、親子関係、夫婦関係、パートナーの関係において、それぞれの関係性に基づくカテゴリー規範が現れ、それによってカミングアウトが困難になることがあつた。

本研究の意義は、以下の点にあると思われる。第一に、性別カテゴリーをめぐる当事者の心的構造を描くことで、固定的なものと考えられがちなカテゴリーの肯定的な側面を明らかにした点。第二に、当事者の身体違和感が、単純に生物学的に決定されるものではなく、社会的な状況によって変化する様子を描いた点。第三に、カミングアウトに影響する相互行為秩序を明らかにした点。例えば、知り合いへのカミングアウトがうまくいかないのは、内面的なことを話し合うことが一般的ではない関係性であるということも影響している。先行研究では「関係性によるもの」としか語られなかつた性的マイノリティをめぐる相互行為秩序について、それぞれの関係性でどのような規範が特徴的に見られるのかを、より具体的な形で明らかにした。